

## ■第1回江戸文化サロン「寛永期が生んだ文化」

第1回の「江戸文化サロン」は2014年6月11日夕刻6時半から東京・神保町区民館で開催され、当会顧問の総合文化研究所代表 西川壽麿氏による基調講演が行われた。

開始前には、西川氏による所蔵古書の紹介画面がスクリーンに映し出され、神保町で行われるに相応しい雰囲気となった。当日の話題に関連する古書として『日本城郭史』（昭和11年雄山閣）、『日本建築史の研究』（昭和18年桑名文星堂）などの建築史や美術史、『各傳比較 點茶活法』（明治34年博文館）のような茶道史など、幾冊か紹介された。

参会者全員が揃ったところで、当会理事の木川静雄が挨拶、「東京の基礎となった江戸時代の文化伝統・日本の文化を掘り起こし、勉強し、未来の東京に向かって発信して行きたい」と述べ、講師を務める西川氏の紹介があった。

今回は初回のため、西川氏に一方的に話していただく基調講演形式になり、話の枕から引き込まれた。内容は「寛永年間」をプロジェクター映像とともに分かりやすく多岐にわたり解説するもので、エネルギーに、格調高く、ときに講談風に、ときに落語風に、2時間近く聴手を飽きさせずに語られた。

「メモを取る必要はない」という幕末横井小楠スタイルの講義だ、とのことで、多くの人はメモを取らず、ひたすら話に没入して頭脳フル回転の楽しい時間を過ごした。最後のオチには、一同「してやられた」といった表情で、思わず笑いと拍手が巻き起こった。

### ●西川氏講演内容の構成

基調講演とは言え、内容は寛永年間の軸に多岐にわたった。およそ次のような構成でした。「日本人に染みわたる『〇』の秘伝」→「『近世』とは？」→「『寛永』という元号」→「寛永期年表」→「寛永の文化を一気にまとめると…」→「寛永期の出版文化」→「寛永期の著名人」→「京都のなかの寛永」→「江戸時代の『相伝』項目」→「寛永期の政治・行政」そして、講演後に「質疑応答」が行われた。

※ 紙面の関係上その全てを掲載することができませんが、登場人物も舞台現場も多数のお話だったので、一層この記録内容を求めておられる方が多いことと思います。そこで西川氏スタッフにまとめて頂いた、以下の「基調講演記録」をお楽しみ下さい。

# 第1回江戸文化サロン「寛永期が生んだ文化」

## 基調講演記録

講師：西川壽磨氏

●プロフィール●

シンクタンカー（文化, 文化設計, 文化戦略, 地域づくり）

総合文化研究所代表, 日本文化フォーラム代表, 神保町シンクタンク座長

---

はじめに

### ■「堅いこと」ほど、大ブームになる

座ったままで失礼いたしますが、西川と申します。よろしく願いいたします。

さて、さきほど、古書をご覧頂きましたけれども、いまでも空港ターミナルやホテルに入っております「改造社書店」ってところがありますよね、あそこは戦前までは有名な出版社でした。鹿児島県川内（せんだい）出身の山本實彦（さねひこ）氏創業の社で、戦前アインシュタインを呼んだのもあの会社です。『現代日本文学全集』など著名企画が幾つもあります。この山本實彦さんの名言があります。云わく「堅いことをやったほうが良い。堅いことほど大ブームになる」と。

それで今日は、最初から「堅い話」になりますが、どうぞよろしく願いいたします。

---

## 第1章 日本人に染み渡る「〇」の秘伝

とはいえ、視聴率を取らなくてはなりませんから、そこで先ずこれをご覧いただきたいと思います。（スクリーンにムービーが映し出される）

子どもたちが横断歩道を渡っていきます。はい、クルマの運転手に向かって挨拶をしております。

たったこれだけのムービーですが、世界中から何十万アクセスと入っています。

要は、こういう日本人の資質、スタイルというものがなかなか外国人にうまく説明することもできなければ、もちろん教えてくれと言われてなかなか教えられるような事でもない。そもそも、日頃私たち自身それほど意識しているわけでもない。

しかし、本当はリニアですとか地下鉄ですとか水道の濾過システムだとか、そういうインフラを伝えるよりも、むしろこういうちょっとしたマナーと申しますか道徳と申しますか、こういったこと伝えて欲しいと思っている国は世界中いろんな所にあるはずなんです。しかもこれを上手に伝えていけば、もっと日本のことも理解されるのではと思われま

す。はい、それでみなさんも実は歴史の本を読んで小さい頃からお気づきになっていることが一つあるわけですね。この「日本人に染み渡る『○』の秘伝」…なにかこれがあるらしい。その「○」を埋めるものはいったい何でしょうか。「できればそれを説明してもらえませんか？」と海外から最近言われ始めている。それは何でしょう。

## ■日本人が密かに気づいていること

では、一例を出します。

この掛幅に描かれているのは聖徳太子です。曲尺（かねじゃく）を持ってお立ちになっています。当時は「規矩術（きくじゅつ）」と言います。巨人の「巨」という字がありますが、あれは曲尺を手に持っている象形を表したものです。

聖徳太子は小さい頃からご聡明で、大勢の人たちのご意見を聞く豊かな耳を持ち、つまり非常に頭がよろしくて…、そして、このように数学理科系に大変お強い。そうしたイメージが江戸以前からあるのと、江戸時代は「太子講」（たいしこう）という講の集まりが大工さんたちの間で行われていて、現在でもそれは続いています。

それでもう一つ、皆さんお気づきになっていることがあるんですね。聖徳太子から豊臣秀吉に行って、そして徳川家康に行った…と。なにやら共通点があるな…と。

聖徳太子というのは別名「トヨトミミ」「トヨサトミミ」と呼ばれておられた…と。そもそも聖徳太子の自分は生まれ変わりだと言っていたのは日本史の中でたくさん居られます。藤原道長などもそうでした。

## ■「豊臣」

けれども、ここで取り上げたいのは豊臣秀吉の「豊臣」という姓です。藤吉郎は初めは「木下」、そして「羽柴秀吉」、山崎の合戦後は信長の後継者であるからと「平秀吉」、天正13年7月関白になるに際して左大臣近衛信輔の父前久（さきひさ）の猶子（ゆうし）となり「藤原秀吉」となっていたわけですが、同年9月には藤原姓を改め、聖徳太子の御名前「豊聡耳」（とよとみみ）を漢字二文字にした「豊臣」の姓を賜ります。

実は当時の公家の方々にとっては、秀吉がもしかしたら、天皇に成り変わるぐらい高い地位をつくってしまうのではないかと、そういう位置を欲しているのではないかとという恐れがあつもんですから、天皇には絶対になれない姓を与えようとの意図が一方でございまして、聖徳太子のお名前から「豊臣」という姓を下賜したわけです。

## ■「徳川」

すでに皆さんご存知かと思いますが、「徳川」はどうでしょう。

平安末期・鎌倉初期の武将にして新田氏の祖、新田義重（にったよししげ）の末子に新田義季（よしすえ）という人、現在の群馬県太田市辺りの「得川（徳川）郷」というところに住んで「得川（徳川）」を称した。それがのちに諸国流浪して三河松平郷、現在の豊田市に住んだ松平親氏（ちかうじ）が松平家の始祖だからと、その親氏の先祖の名である「徳川」を申請します。そして、1566年勅許を得て「徳川」と改姓し従（じゅ）五位下三河守に叙任されました。

家康は結局しばらくのあいだ「徳川」という姓を親族息子誰にも名乗らせませんでした。他の親族は「松平」で、「徳川」と名乗っているのは自分だけである…という位置を何年かキープする。これは、親族あるいは息子たちにも効果があったのと、家臣団統制にも効果があったわけです。

## ■流れ続ける「徳」

そんなに歴史にお詳しくない方も、これはちょっとした都市伝説のように密かに家族や友人と語り合っておられるのではないのでしょうか。聖徳太子の心は消えない、日本の伏流となっている…と。

明治になっても渋沢栄一、この間もテレビで特集されましたが「論語と算盤」「道徳経済合一説」というのは有名ですよ。明治維新後も「徳」を強調している。

福沢諭吉も「智徳」（ちとく）という事を言った。知識・知恵だけではダメなんです、「徳」というものが必要なんですと言っている。

いずれにしても、我が国で「徳」を語らずに学校を開いたり人前でスピーチする人は見かけないぐらい重要なキーワードとなっています。

渋沢栄一は、埼玉県ご出身の方はよくご存知かと思いますが。資本主義は急には生まれにくい制度である、「徳」というものがないと資本主義というものは作れないし機能もしないんだということを言い続けた。昨今、いろんな国々の事情を見るにつけ、みなさんも思い当たる節はあるかと思いますが。

---

## 第2章「近世」とは

### ■家光の見た夢

ではだんだん話に入ってまいります。家光という方は寛永時代の将軍でございますが、この方の特集の展覧会をやりますと必ず出てくるこういう画があるんですね。いずれも家康公を描いた画です。

ところが、これはですね。家康公の夢を見たんですね、家光が。それも寛永年間終わりの頃には頻繁に見ておりました、それを御用絵師の大先生の狩野探幽先生に毎回これを描き写させている。これが幾つもあるんですね。

秀忠が在命のうちにはなかなかそれほど露骨には行動できなかったようですが、秀忠が亡くなった後はもう、家康というのが自分の本当の父親なんだと本気で思っていた。

家光の言を待つまでもなく、「シンクタンカー家康」は知れば知るほど侮れない人物です。

## ■「近世」

大ブームになるかもしれない「堅い話」にさらに移ってまいります、**「近世」**という時代区分があるんです。これは明治以降に日本の歴史学はこの「近世」ということを言い出しました。明治時代、西洋ではハーバード・スペンサーの社会進化論が風靡していました。そういうことにも影響されたかもしれませんが、西洋の文明発達と比較したときに「古代・封建時代・近代」というふうには日本史は説明しにくい、どうしても「古代・中世・近世・近代」としたい。これは現代でも似たような状態で、「近世」というわかりにくい区分を使っているのは、日本が筆頭に居るかと思えます。

## ■漢数字の「一」を用いて説明すると

これを漢数字（筆書き楷書体）の「一」の文字を使って、説明してみたいと思います。

いったい「近世」はいつから始まったのかと。一つは永禄11年（1568）の信長が京都に進出した時かなあ。あるいは豊臣政権の検知あたり天正18年（1590）頃かなあ。はたまた関ヶ原の戦いあたり1600年（慶長5）ジャスト。いや、江戸に幕府を開いた1603年。大坂の陣が終わって元和偃武1615年かなあと幾つか説があると思えます。

では終わりはいつかといいますと、皆さん思い浮かべるのはペリーが来航した嘉永6年（1853）とするか、あるいは日本側が港を開いた翌年の安政元年（1854）とするか、あるいは普通に明治維新前年の慶応3年（1867）あるいは明治元年（1868）とするか…ということになると思えます。

そのぐらい始まりも終わりも幾説あると言えますが、共通していえるのは真ん中のところは「江戸時代」であるということです。つまり近世はイコールほとんど「江戸時代」本体のことだと言って構わない。別の言い方をすると、江戸時代をどうしても文明史の上に位置づけたいために「近世」という時代区分の語を使って説明しているかに思えます。

いま、これをたまたま漢数字の「一」を用いて解説しておりますので、あそこの「止め」のところの一つ高く上に盛り上がっているところあたりがペリー来航だといたしますと、そのちょっと前あたりが「弘化・嘉永年間」辺りということになると思えます。

もし皆さん「観光」に携わっている方がおられれば今年のサロンの後半にとっておきたいと思いますが、弘化・嘉永年間の人々の観光行動というのは実に研究に値します。

それから、幕末・維新の横井小楠（坂本龍馬の師）だとか渋沢栄一だとかいったファンの方々は、あそこから横に伸ばしていったのではなく、下に降ろして行く線があったんじ

やないか、あそこから「司」という字を書こうとしたのか一丁の「丁」という字を書こうとしたのか、下に降ろして行く覚悟で西洋の文明を学んで行こうと強い動機を持ってスタートしたといえるのではないか。

あるいは大工・建築・規矩術をやっておられる方々は江戸時代というのをこのまま横に見せておくと、梁のような状態であるけれども、実はこれは柱となっているんじゃないかと考える方々も居られるでしょうし、いまインバウンドという事が始まって、海外から日本に来て日本を深く知ろうという外国人がようやく現れたこの瞬間には、むしろこの「近世」というものを使って「□（くにがまえ）」を作ろうという時代が始まっているんじゃないかとも観察できるかと思います。

## ■江戸時代を見る中で浮かんでくるキーワード

江戸時代の別の言い方をしますとさきほど古書の紹介のところで見ましたように、日本の歴史学や建築史というのはまだ非常に若い学問ですので、社会制度中心で研究して来ていますし、建築も構造・工法中心に研究してきている。

しかし、今われわれが実際に見落としがちなのは、「金銭・経済的報酬」としての文明の他に、実は、「文化的報酬」だとか、こんにち一般語で既に使われる「社会的報酬」すなわち名誉評判の類。

あるいは「環境的報酬」。実際お米そのものが貨幣の代わりをするというような体験をしている国は日本だけですから。

それから、横断歩道の子供たちをご覧いただいたように、「道徳的報酬」です。いつかそういう世の中を目指そうとか、あの世でそういう目に会おうではなく、今生きている間にそういう文化というものを体験しよう、実現しようということ。

そういう人々の欲求に応える社会制度、そういったものが特に、江戸時代を見る中で浮かんでくるキーワードだということです。

---

## 第3章「寛永」

### ■「寛永」

では、いよいよ「寛永」の中に入って行きます。これは、西暦で申しますと1624-44年に使われていた元号です。

元号を決めるときや、新しいキーワード、文化コンセプトを作ろうという時はどうするか。天智天皇が学職（ふんやのつかさ）を設置しその後、律令制の中で大学寮制度ができましたけども、当時必修として読ませていた『易経』（『周易』）だとか『毛詩』だとか、こういった書籍から引用します。これはまた今年の後半あたりで解説しますが、新しいコンセプトの素晴らしい日本語を作るときはどういう段取りで行かないといけないのかということがあられるわけですね。例えば「観光」の語は『易経』（『周易』）から採っています。

「寛永」は、『毛詩朱氏注』（『詩集伝』衛風考槃の注）にある「寛広、永長」の文言ですね。そこから採っています。

後水尾・明正・後光明の三天皇の在位に掛かっている年号です。

第108代後水尾天皇が即位式をされたのは16歳のとき1611（慶長16）年4月12日でした。

そして、次の元和年間を経て、この元和10年2月30日に甲子（かっし）革命、すなわち60年に一度の甲子（きのえね）の年は政治上の変革が起こる運にあたるという思想により「寛永」に改元いたしました。文章博士菅原長維の勘申（かんじん）によるものです。

ところが、後水尾天皇は寛永6年（1629）11月、突然の譲位を宣言し、翌寛永7年9月12日、7歳の興子（おきこ）内親王が即位式をされます。

そう、のちに「明正（めいしょう）天皇」の諡（おくりな）で呼ばれるこの第109代天皇です。和子（まさこ）様のお子様、徳川秀忠の外孫です。奈良時代の称徳天皇以来859年ぶりの女帝です。7歳の女帝ですから、後水尾院が院政を為されたわけです。

そして、異母兄弟である弟の「素鷲（すが）宮」紹仁（つぐひと）親王の成長を待ちます。

興子（おきこ）さまは、寛永20年10月3日、紹仁（つぐひと）さまに位を譲ります。興子さま在位14年21歳のときです。

紹仁（つぐひと）さまは、第110代「後光明（ごこうみょう）天皇」となられます。後水尾院は院政を続けます。

ところが、一つの年号が三天皇にわたった前例はないとして、改元の議が起ります。

## ■「正保」

次の元号はご存知の方いらっしゃいますか？「寛永」のあとの元号ですね。

「正保」（しょうほ、しょうほう）です。

この「正保」という元号は家光が決めました。一応、文章博士菅原知長の勘文に「尚書正義曰、先正保衡佐我烈祖、格于皇天」を採用したことになっていますが、「公家武家の政は正きにしくはなし、正しくして保（たも）たば大吉なり」と決めたと、林羅山の三男である林鷲峯（はやし・がほう）『改元物語』には書かれています。

ところがこれは京都で大不評となりまして、まず「正保は焼亡の音と似ている」、それから「保の字は人口木とよめる」「正保元年と連書すれば、正に保元の年とよみ、大乱のきざしなり」、「正の字は一にして止るとよむ、久しくない兆である」ととにかく悪評が出尽くします。そしてとうとうこれは本当によくない兆しを持つ元号ではないかと世論が高まりに高まってしまいまして、結局次に「慶安」という元号に替えたわけです。たった5年と2ヶ月で「正保」は終わってしまいます。

なお、さきほどの興子（おきこ）さま、即ち「明正天皇」はご譲位の後も御所にそのまま住まわれ、元禄9年74歳で崩御されます。

## ■「寛永」というブランド

なぜこれを語るかという、江戸時代の元号の中で「寛永」というのは映えるブランドであることをご承知おき頂きたいからです。その後の「正保」は、このように当時から評判がよくありませんでした。

それから「寛永」は、「寛永寺」というお寺の名前に使われます。寛永年間に付いたわけではなく慶安年間になって創建時の年号をとり「寛永寺」の勅号を与えられました。

それから皆さんの中にコインコレクターの方がおられれば「寛永通宝に始まり、寛永通宝に終わる」と言われまして、まさにコレクターアイテムとして「寛永通宝」というのは日本人のコレクターだけではなく海外の方にも人気のコインです。しかも、寛永年間にだけ作られていたわけでもなく、江戸で作られていただけでもない。水戸で作られたのも有ったり、他の時代に作られたのも有ったり…。

これも今年の後半、別の機会に、元日銀マンの友人を呼んで解説してもらおう予定です。

## ■「菊と葵」

寛永年間の文化について特集した場合、一般的とも言える「見出し」があります。

一つは「菊と葵」。「菊」とは後水尾院はじめ宮中における文化、桂離宮そのあとの修学院離宮や東福門院のお好みなど。「葵」とは家光の江戸幕府のこと言っているわけですが有名なのは日光の東照宮陽明門です。

「日光と桂」。これも今言ったような意味です。

また、この「菊と葵」の間を、秀忠とお江の愛娘である東福門院和子さまが繋いでいる点も見逃せません。

## ■城下町都市基盤の創出

次に「城下町都市基盤の創出」ということが挙げられます。

現在我々が県庁所在地として思い描いているようなところは幕末開港発展型の横浜・神戸や門前町長野など例外あるものの、城下町が圧倒的に多いわけです。

元和年間の「一国一城令」というものもあり、文字通り一国一城が認められ寛永期は各藩にて整備事業が行われています。

他の城が壊されて、一つだけ、今でいう県庁所在地のようなところの城だけが残され、それを徹底的に整備することになったわけです。もちろん例外もありまして、有名なのは秋田久保田藩佐竹家です。居城久保田城のほかの藩内複数の城下町を整備しています。

では、それぞれの城下町の特色を面積比較で眺めてみましょう。比較しているのは名古屋の万治年間を除いて、すべて正保年間となります。

まず、江戸という城下町は、『正保年間江戸絵図』から割り出すと、総面積43.95km<sup>2</sup>に対して、武家地面積が77.4%、町人地9.8%、寺社地10.3%、空き地その他が2.5%です。



京都はどうかというと『寛永後万治前京都全図』から割り出すと、総面積20.87km<sup>2</sup>に対して、公家地3.3%、武家地5%、町人地40.1%、寺社地14%、空地・その他が37.6%となっています。禁中・公家の都市とはいうものの、意外に町人地が多いと感ずるでしょう。

大坂はどうでしょう。『大坂三郷町絵図』によりますと、総面積15.05km<sup>2</sup>に対して武家地22.3%、町人地57.7%、寺社地7.8%、空地・その他12.2%となります。武家地面積が他の都市に比べ圧倒的に少なく、やはり町人の都市です。

名古屋のデータは、万治年間1660年ごろのものですが『名古屋御城下絵図』によると、総面積9.20km<sup>2</sup>に対して、武家地61.8%、町人地23.7%、寺社地12.4%、空地・その他2.1%です。

仙台と金沢を見ておきましょうか。

仙台は、『陸前国仙台城絵図』から割り出しますと、総面積10.37km<sup>2</sup>に対して、武家地72.9%、町人地11.1%、寺社地16%となっています。仙台は圧倒的に武家地の比率が高いですね。

金沢はどうでしょう。

『加賀国金沢之絵図』によりますと、総面積7.46km<sup>2</sup>に対して、武家地65.8%、町人地21.2%、寺社地10.6%、空地・その他2.4%とそれぞれなっております。

いずれにせよ、兵農分離により全家臣団が城下へ集められ住み、商農分離により領内の商工業者も城下に強制的に移住させられました。

このように「寛永期」はこうした都市整備をふくめ、後から振り返りましても重要な時期であったといえるでしょう。

そして、光悦や二代目池坊専好はじめ、さまざまな人々が文化創造集団のリーダーとなり、上下身分不問の会合が開かれます。こうした中から剣道・華道・茶道・煎茶・落語をはじめ、江戸文化の基礎となるような様々なコンテンツが生み出されます。また、この間に、こんにちの和風住宅の基本ともなった「数寄屋造」様式が出来上がってきます。書院造に茶室（数寄屋）の風情を加えた「数寄屋造」という様式が、寛永期建築の特色です。

また、儒教・道教の故事を彫り込んだ唐破風の御成門は、日光東照宮陽明門に見るようにこの時期の特色です。

小堀遠州の担当した作事や作庭・造園を追いかけていくと、さらにこの辺の状況がよく理解できます。今年後半のサロンではそのような話題も入れたいと思います。

---

#### ※ 「江戸文化サロン」事務局より

西川氏の講演は、このあとまだまだ続きましたが、このホームページ上での掲載はここまでとさせていただきます。ここまでお読みいただきありがとうございました。